

## 国人領主の在京活動——備中国新見氏と御蔵職

吉永 隆記

近年、室町・戦国期における国人の在京活動<sup>ざいきょう</sup>については、将軍との関係を重視した視点で成果が出されている。地方の国人たちは、将軍との繋がりを梃子に、京都において権益獲得を図っていたとされるが、国人の在京活動は決して将軍との関係のみに集約されるものではない。そこで本稿では、国人の主体的な在京活動の実態をうかがい、その意味を明らかにしたい。

備中国<sup>びつちゅう</sup>の新見氏<sup>にいみ</sup>は、一族を在京させ、京都において多角的に権益獲得活動を展開した。これまで注目されてきた東寺の代官職<sup>だいかんしき</sup>も、こうした活動を通して獲得した権益の一つである。このほか、新見氏は蔵人所<sup>くろうどどころ</sup>の下級官人となり、御蔵職<sup>みくらしき</sup>という権益も獲得していた。御蔵職は、諸国の鉄や鋳物師と密接に関わった権益であり、後に真継氏<sup>まつぎ</sup>が新見氏から奪取した。真継氏は、近世に御蔵職を代々相伝し、蔵人所の下級官人として全国の鋳物師を統括するようになった。この前提となっていたのは、戦国期に新見氏が築いた畿内鋳物師との関係である。

新見氏は、拠点とした新見庄<sup>にいみのしょう</sup>が産鉄地であることを利用していた。畿内の商人たちは、畿内から鉄を求めて新見庄へ下向し、頻繁に往来していた。荘園領主の東寺への年貢輸送に際しても、新見氏は頻繁に商人の往来を利用していった。すなわち、新見氏は、鉄を求める畿内商人の流通路と密接に関わっており、彼らを利用した荘園経営を担う存在であった。そのような過程で、新見氏は畿内の鋳物師とも関わりをもつようになり、双方の利益を保証する御蔵職という権益を創出した。

戦国期の国人たちは、京都において貪欲な権益獲得活動を行っていた。将軍との関係、寺社との関係、朝廷との関係など、彼らは主体的・多角的に諸権力と関わりをもち、自身の拠点における在地支配と並行して、中央の権益獲得活動を展開したのである。